様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 １７ 日現在

機関番号：３４３１５
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2012～2014
課題番号：２４５２０３２８

研究課題名（和文）エリザベス朝イングランドにおける騎士道ロマンスの発展と変容に関する文化史的研究

研究課題名（英文）Research on the Development and Transformation of Chivalric Romance in Elizabethan England

研究代表者
竹村　はるみ（TAKEMURA, HARUMI）

立命館大学・文学部・教授

研究者番号：７０２９９１２１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、エリザベス朝イングランドにおける騎士道ロマンスのリバイバルに着目し、この中世伝来の文学様式が大衆劇場、印刷出版、宮廷祝祭や都市祝祭という多様なメディアを媒介として発展・変容する過程を文化史的視点から考察した。特に、近代初期イングランドにおける市民文化の成熟を背景として、騎士道ロマンスが階級的かつ地理的に拡散する現象を明らかにした。また、騎士道ロマンスの伝統的なモチーフや主題が改変され、様々な共同体の理念や理想を反映させるために新たな意味づけが付与される中で、騎士道ロマンスが他の文学ジャンルには見られない文化的持続性や混淆性を獲得するに至った過程を跡づけた。

研究成果の概要（英文）：My research focuses on the revival of chivalric romance in Elizabethan England and reconsiders how the genre, originating in medieval times, undergoes various changes and develops its form and style through the advent of diverse media---public theatres, print culture, and festivities, both courtly and civic. It seeks to historicize the process of the geographical and social diversification of the genre by examining the interaction between courtly literature and civic culture. The close analysis of how romantic motifs and themes are modified and rewritten offers a clear view of the cultural hybridity and sustainability asserted by the Elizabethan chivalric romance.

研究分野：人文学

キーワード：英文学　騎士道ロマンス　エリザベス朝　祝祭

１．研究開始当初の背景

本研究は、従来は宮廷文化の領有物として捉えられる傾向にあった騎士道ロマンスを、高次文化と低次文化の結節点として捉え直すことによって、その文化的・文学的意義を再検証するとともに、宮廷文化と市民文化が物理的・精神的に緊密な関係にあったエリザベス朝イングランド特有の文化的風土を明らかにすることを目指した。

２．研究の目的

本研究は、エリザベス一世を称揚する処女王崇拝の言説が高まりを見せた 1570 年代後半から女王の求心力に翳りが生じる 1590 年代までの時期に焦点を当て、この間に騎士道ロマンスが辿った変遷の過程を文化史的に跡づけることを目指した。特に、公衆劇場の隆盛、印刷出版文化の成熟、祝祭文化の昂揚を背景として、騎士道ロマンスの文学伝統や主題が様々なメディアを通して従来よりもはるかに幅広い階層に対して訴求力を有するに至った経緯を解明することを目的とした。

３．研究の方法

本研究は、詩・演劇・散文という 3 つの文学ジャンルに加えて、祝祭に関する同時代の様々な記録も研究対象とすることにより、領域横断的な視座からエリザベス朝騎士道ロマンスの文化に関する研究を遂行した。具体的には､以下の 2 方面からの調査を実施した。

(1)エリザベス朝文学における宮廷文化と市民文化の混淆に関する考察

(2)エリザベス朝祝祭文化における騎士道ロマンスの文学伝統の分析

４．研究成果

本研究が検証したのは、宮廷文化と大衆文化が相互補完的な関係にあったエリザベス朝特有の文化的風土とその文学的意義である。エリザベス朝イングランドでは、中世においては王侯貴族の領有物だった騎士道ロマンスが印刷出版と商業劇場という二大メディアの成熟を機に一気に市民層に拡散するという興味深い現象が生じた。本研究ではさらに、騎士道ロマンスの伝播において祝祭文化が果たした役割を検証し、宮廷祝祭と市民祝祭の双方向的な影響関係を指摘した。エリザベス朝文学と祝祭文化の分析を通して、エリザベス朝騎士道ロマンスの特異性は宮廷文化から大衆文化へと浸透するそのダイナミックなプロセスにこそ見出されることが明らかになった。以下、本研究の成果を主要な 2 つのテーマに分類して略述する。

(1)エリザベス朝文学における宮廷文化と市民文化の混淆

もともとは王侯貴族の娯楽として読まれた騎士道ロマンスが大衆文化へとその裾野を広げたのは、印刷技術の普及に拠るところが大きい。イングランドではウィリアム・キャクストンによって活版印刷が開始されると、16 世紀後半には書籍業組合が設立され、印刷出版文化が一気に広まった。経済力、政治力を備えた市民階級が新たな文化の担い手となり、主として貴族階級の読み物として発展してきた騎士道ロマンスはまたたくまに民衆の間で大流行する。

トマス・ディローニーが 1590 年代に執筆した一連の散文物語は、騎士道ロマンスの社会的拡散という問題を考察する上で興味深い視座を提供する。ディローニーの散文物語の特徴は、自身が所属する織物業組合を始めとするリヴァリ・カンパニーへのメッセージが作品世界の基盤を成している点にある。16 世紀後半は、旧来のギルド社会が崩壊の危機に瀕した時期に相当する。ディローニーは、外国人労働者の問題や対外戦争の影響等、この時代の織物業組合が直面した様々な問題を作品内に散りばめると共に、共同体の危機意識や英雄的指導者への期待感を投影することによって、読者に対して警告や提言を発していたことが窺える。

一方、印刷出版によって大衆に普及したロマンスは、大衆劇場でも芝居としてさかんに上演されることになる。騎士道ロマンス劇の戯曲は散逸してしまってほとんど現存していないが、様々な記録に残っているタイトルからは、その人気のほどが推測できる。当時の観客のロマンス趣味は、ロンドンの大衆劇場を湧かせたシェイクスピアの戯曲にもある程度窺うことができる。シェイクスピアの戯曲には騎士道ロマンス劇こそないものの、その喜劇作品には魔法や難破、生き別れになる親兄弟といった、ロマンス特有の様々なモティーフが上手く取り入れられている。

騎士道文学の衰退をもたらしたのは、宗教改革でもなければ人文主義でもなく、他ならぬ民衆への社会的拡散であったとする定説がある。騎士道ロマンスが王侯貴族や知識層から市民を主体とする民衆にいわば「下賜」された時、文学としてのロマンスの空洞化が始まったという見方である。このような進化論的な文学史観に立てば、エリザベス朝大衆文化における騎士道ロマンスは、中世以降ゆっくりと瓦解してきた騎士道文学の残滓とも言うべき姿を晒していることになる。しかし、本研究が明らかにしたように、16 世紀末のロンドンで生産、消費された騎士道ロマンスは、台頭する市民層が共同体の倫理や秩序を構築し、集団的記憶を醸成していく過程を鮮やかに映し出している。そこには、英雄の出現を待ち望む期待感、暴力的なエネルギーの充溢、祝祭的なユーフォリア、土俗的で野卑な大衆性といった、宮廷を発信源とする人文主義的な騎士道ロマンスが周到に排除したロマンス本来の特性が、大衆演劇や廉価な出版物によって再生産され、新しい理念を吹き込まれていく様子を見て取ることができる。ロマンスの大衆化は現代文化にも見られる現象であるが、エリザベス朝の市民派騎士道ロマンスはまさにその黎明を告げる文化

的転換点を呈示するものと言えよう。

(2)エリザベス朝祝祭文化における騎士道ロマンスの文学伝統の変容

エリザベス朝の宮廷文化におけるロマンス趣味は、例えば一大ブームを迎えた馬上槍試合に顕著に窺える。女王の戴冠記念日の余興として毎年 11 月 17 日に催された馬上槍試合は華麗さを極め、さながら中世の騎士道ロマンスの再現といった趣を呈した。当時においてすら時代錯誤も甚だしいこの祝祭は、エリザベス朝の中世ロマンス趣味にぴたりとはまり、独自の処女王ロマンスを構築していく。1590 年代のイングランドでは、エドマンド・スペンサーの『妖精の女王』（1590, 1596）とフィリップ・シドニーの『アーケイディア』(1590)という、騎士道ロマンス文学の金字塔とも言える作品が相次いで出版されるが、それはエリザベス一世の宮廷における祝祭文化によって胚胎されたと言っても過言ではない。本研究では、エリザベス朝の宮廷祝祭における騎士道ロマンス文化の背景を成す政治的文脈を解明した上で、それが地方及びロンドンにおける市民祝祭に与えた影響を考察した。

エリザベス朝における騎士道ロマンスの政治化を示す重要な事例として本研究が着目したのは、同時代におけるガーター騎士団の発展である。現在もイギリスの勲爵位の最高位として知られるガーター勲章は、1348 年にエドワード三世がアーサー王の円卓の騎士団に倣って創設したものである。12 世紀末の十字軍遠征の際に苦戦するイングランド兵達の間で熱烈な崇敬を受けた聖ジョージが騎士団の守護聖人に定められ、ウィンザー城に建設された聖ジョージ礼拝堂がその本拠地となる。この中世色の濃い騎士団はエリザベス朝において再び脚光を浴びることになるが、そこには宗教改革後のイングランドならではの修正が施された。まず一つは、ガーター騎士団の根幹にあった中世カトリック的な聖人崇拝の性質を排除し、それを君主崇拝へと転用したことである。そしてもう一つは、中世の騎士団が掲げていたイスラム教徒に対するキリスト教徒の聖戦という旗印を、カトリックに対するプロテスタントの聖戦へと転換したことである。この転換は、騎士道ロマンスに内在する二つの方向性と連動している。そもそも、騎士道文化は、君主に対する貴族の忠誠を賛美し、両者の同志的連帯感を強化する一方で、騎士個人の飽くなき名誉への探求心を理想化する点において、軍人貴族の士気を鼓舞する効果を発揮する。騎士道文化のレトリックがエリザベス朝の宮廷政治において活用される時、それはもはや処女王賛歌のレトリックに資するだけではなく、レスター伯やエセックス伯ら反カトリックの外交政策を主張する武闘派プロテスタント貴族にとっても格好の象徴体系を提供することとなった。本研究では、エリザベス朝宮廷における騎士道文化の流行が 1580 年代以降のイングランドの軍事政策の行方と密接に連動していることを明らかにした。

さらに本研究では、これまでほとんど研究されていない法学院祝祭に焦点を当て、それを特に 1590 年代の政治危機の文脈で読み解くことによって、エリザベス朝末期における騎士道ロマンス文化の分離とも言える現象を指摘した。エリザベス朝の法学院祝祭と言えば、1561 年の暮れから翌年にかけてインナー・テンプル法学院で催されたクリスマス祝祭が知られる。後のレスター伯爵ことロバート・ダドリー扮するクリスマスの王は、総勢 100 名の法学院生から成る「ペガサスの騎士団」を従えてロンドン市中を練り歩き、市民を驚嘆させた。この余興には、以後継承される法学院祝祭の特性を端的に窺うことができる。それは、法学院祝祭が騎士道ロマンス色の強い宮廷祝祭の様式を取り込む一方、その一部をロンドン市民に開放することにより、市民祝祭としての機能も有していた点である。

ウェストミンスターとシティのちょうど中間に位置する法学院エリアは、もともとは歓楽街から離れた場所であった。ところが、16 世紀後半になると、その勉学環境はロンドンの肥大化に伴って一変する。テムズ川を挟んだ対岸のサザックには芝居小屋と売春宿が立ち並び、金貸し業者や私設劇場が密集するブラックフライアーズも目と鼻の先である。16 世紀末の法学院には、宮廷と市民社会が精神的・物理的に緊密な形で共存していたエリザベス朝特有の都市空間の雛型を見ることができる。宮廷と市民社会の接点としての法学院の新たな特質は、法学院の構成員の変化にも表れている。奨学金制度を持たない法学院は大学よりも学費が高く、当初のメンバーは裕福なジェントリー階級によって占められていた。しかし、16 世紀後半になると、新たに財を蓄えたロンドンや地方の商人の子弟が多数入学し、従来よりも幅広い階層のメンバーを抱えるようになっていた。

本研究では、記録の残る 1590 年代の二つの法学院祝祭、グレイ法学院で行われた『ゲスタ・グレイオールム』(1594～1595 年)とミドル・テンプル法学院で行われた『愛の王』（1596～1597 年）を取り上げ、親密かつ多分に政治的な法学院の共同体において宮廷祝祭の騎士道ロマンス的モティーフがいかに援用されているかを分析した。調査の結果、二つの法学院祝祭が共に、1580 年代後半以降一躍宮廷祝祭の寵児となったエセックス伯が標榜する騎士道的エートスの影響を色濃く留める一方、特に『愛の王』においては、こうした騎士道精神を揶揄する形で市民的な倫理観や政治理念が前景化されている点を指摘し、宮廷文化と市民文化の混淆を跡づける興味深い知見を得た。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 2 件）
①著者名：竹村はるみ、論文標題：”Sweet issue of a more sweet-smelling sire”―スペンサーのアドーニスの庭と『ヴィーナスとアドーニス』、雑誌名：Shakespeare Journal、査読：有、巻：1（通巻 54）、発行年：2015 年、ページ：25-37
②著者名：竹村はるみ、論文標題：『ゲスタ・グレイオールム』における騎士道的友愛のスペクタクル、雑誌名：立命館文学、査読：有、巻：634、発行年：2014 年、ページ：676-689

〔学会発表〕（計 3 件）
①発表者名：竹村はるみ、発表標題：1590 年代における法学院の祝祭文化、学会名：関西シェイクスピア研究会、発表年月日：2014 年 12 月 14 日、発表場所：龍谷大学大阪梅田キャンパス（大阪府・大阪市）
②発表者名：竹村はるみ、発表標題：『ゲスタ・グレイオールム』と『愛の王』―1590 年代における法学院の祝祭文化、学会名：「宗教とテューダー朝演劇の成立」研究会、発表年月日：2014 年 3 月 25 日、発表場所：慶應義塾大学（東京都・港区）
③発表者名：竹村はるみ、発表標題：友愛のスペクタクル―『ゲスタ・グレイオールム』と 1590 年代の政治危機、学会名：第 51 回シェイクスピア学会、発表年月日：2012 年 10 月 13 日、発表場所：秋田大学（秋田県・秋田市）
〔図書〕（計 2 件）
①著者名：竹村はるみ、論文標題：エリザベス朝宮廷祝祭における〈妖精の女王〉のロマンス的変容、日本シェイクスピア協会編『シェイクスピアと演劇文化』所収、発行年：2012 年、ページ：135-157、研究社
②著者名：竹村はるみ、著書標題：ロマンスの世紀―エリザベス朝騎士道文化の発展と変容（仮題）、出版交渉中
〔産業財産権〕
○出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕（計 2 件）
①講演者：竹村はるみ、講演標題：祝祭都市ロンドン―エリザベス朝の街路の演芸文化、講演先団体名：大阪キワニスクラブ、講演年月日：2013 年 3 月 26 日、講演場所：リーガロイヤルホテル大阪（大阪府）
②講演者：竹村はるみ、講演標題：祝祭都市ロンドン―エリザベス朝の宮廷エンターテイメント、講演先団体名：第 7 回風見鶏の館ヨーロッパ文化セミナー、講演年月日：2012 年 10 月 26 日、講演場所：風見鶏の館（兵庫県）

６．研究組織
(1)研究代表者
竹村 はるみ（TAKEMURA, Harumi）
立命館大学・文学部・教授
研究者番号：70299121